

形白色斜長石の礫を介在せしめ、軽く軟かである。

シイチ 思一 ↓ナゴシシイチ 名越思一。シイヤイナ しいやいな 藩政時代に歳末に来る藤内の物貰ひで、十五六歳の男児が菅笠・呉塵を着し、四つ竹を囃すものであつた。唱詞があつたが傳はらない。

シウメダニバシ しうめ谷橋 金澤橋梁記に、『しうめ谷橋、六斗林』とある。今はその名がないが、六斗林の橋であらう。

ジウニン 慈雲院 加賀藩祖前田利家の子七日市藩祖利孝の法號。詳しくは慈雲院眞翁宗智大居士。

ジウニン 慈雲院 加賀藩主第五代前田綱紀の側室津田氏の法號。詳しくは慈雲院輝室宗青大姉。

ジウンジ 慈雲寺 金澤木綿町に在つて、雨寶山と號し、日蓮宗に屬する。初め天正九年富田治部左衛門・今井彦右衛門が、前田利家に請うて鹿島郡七尾に之を建て、日祐を住持としたに起り、次いで同郡小島に移り、元和二年金澤に再轉したといふ。

ジウンジ 慈雲寺 羽咋郡瓜生に在つて、眞宗東派に屬する。

シエン 旨淵 ↓シヨウガンシエン 松岸旨淵。

シエン 紫園 ↓ソウガハヤスエ 相河屋すゑ。

シオ 子浦 ↓シホ 子浦。シオウジ 四王寺 河北郡五ヶ庄に屬する部落。

ジオウセン 地黄煎 金澤町會所記録元祿九年七月廿七日の觸狀に『ちわうせん並あめ

云々、右今般米拂底に付、此品々公義被召上物之外商賣指止。同六年八月十日の觸狀に、『金澤中之儀は勿論、金澤續町端並河原へ夜中生菓子並酒賣に出申間敷候。かう類・地黄煎などの儀は、町續にて賣申儀は苦しかる間敷候。此等の物も町端・河原等へ夜中賣に罷出候儀仕間敷候』とあり、地黄煎は地黄の根を煎じて混じた餡の一種である。

ジオウセン 地黄煎 石川郡富樫庄に屬する部落。もと泉野新百姓、又は泉野新田とも泉野新ともいうたが、天保中地黄煎村と改めた。

ジオウセンハチマンシヤ 地黄煎八幡社 金澤地黄煎町の街尾に在つて、もと犀川川上當山派山伏寶光寺の持宮であつた。

ジオウセンマチ 地黄煎町 金澤の町名。もと石川郡泉野の枝村なる泉野新百姓が町頭に連綴して民家を設けたもので、寛文二年の文書に古地黄煎町、同十一年に古地黄町、明和の頃は地黄町と私稱した。文政四年二月郡地を町奉行裁許とした時、地黄煎町というて尙相對請地であつたが、明治十二年一般の町地に編入した。町名はもと地黄煎餡を賣る家があつたからであるといふ。一説に淨専寺があつたからであるといふのは非であらう。

シオキバ 仕置場 磔刑及び梟首を行ふ場所を御仕置場というた。金澤市外兩所に設けられ、南方官道に添ふものを上口御仕置場といひ、北方官道に添ふものを下口御仕置場というた。衆人に示して懲戒する爲に、故らかかる位置を選定したのである。

ジオンジ 慈恩寺 能美郡小松に在つて、眞宗東派に屬する。初め石川郡福岡に居たが、

元祿十五年今の地に轉じたといふ。ジオンジ 慈恩寺 石川郡四ッ屋に在つて、眞宗東派に屬する。もと道場であつたが、明治十二年五月寺號公稱の許可を受けた。

ジガイインキヨ 寺外隱居 ↓インキヨ 隱居。シカウラ 志ヶ浦 珠洲郡仁江村のうちの地名。寶曆十四年調書に、『仁江村領志ヶ浦、仁江村より道程四町程。先年は俾集致候へ共、唯今は莫不仕。』とある。

シガウラ 志ヶ浦 鳳至郡南北郷に屬する部落。久麻加夫都阿良加志比古神社藏貞應三年十月の立券狀に、『志賀浦、田在家・鹽釜』とあるものは是である。能登誌には『此磯邊傳ひを志賀浦・根木・鹿島とて、浦わの詠めいとよく云々。』と記する。

シカク 旨廊 ↓テツザンシカク 徹山旨廓。シカクシユウ 此格集 一冊。小松の俳人薄帯が著した發句集である。伊勢の八菊が北國行脚に際して選んだもの。序文は正徳五年未九月下浣於秋海棠とあるが、これは著者である。京橋屋治兵衛板。

シガクベン 志學辨 二冊。澁谷子亮著。専ら志學のことに就き論辨したのもの。門人金森成章等校正評註し、明和庚寅九月門人林翼の序がある。安永三年二月上梓した。

シガゴウ 志賀郷 藩末以降羽咋郡を四大分するに用ひられた名稱の一つで、柴垣・瀧谷附近から、北は赤住附近に至る五十八部落をいふ。

シガザラシ 志賀晒 ↓アブヤヌノ 安部屋布。

ジガタ 地方 聚落の家屋にして町立の狀を爲し、その多分は商工に従事するも、一方に於いて耕作を業とする百姓の住する區域ある場合に、後者を地方と稱した。大聖寺の山田町地方、小松の八日市町地方の類である。能美郡湊が天保十四年町立たるの許可を求めた時の願書に、『百姓之分は地方百姓互相唱申候はゞ、取扱方に付紛敷儀無之云々。』とある。

ジガタ 地方 鳳至郡粟藏の内の小字。シカタマサアキ 鹿田正明 通稱文平。號は謹齋。父正復は足輕小頭であつたが、自らしてその籍を除かれた。正明年十七にして京に上り、小石元瑞に醫及び蘭書を學び、嘉永六年人持組永原氏に仕へて祿五十石を給せられ、尋いで西洋流火術方屋となり、安政元年閏六月土籍に列し、六十石を受け、壯猶館教師に補し、元治元年大砲方裁許に轉じ、長州征討の軍に従ひ、慶應二年大砲歩小頭に進み、祿百石を受け、明治二年陣營次長、同年權少屬、三年文學三等教師となり、四年一月六日歿した。享年五十七。

シガノヤマゴエ 志賀の山越 一冊。狩谷竹輅著。文久三年竹輅が京都に赴いた時の紀行文で、多くの詠歌が挿まれてゐる。

シガハツケイ 志賀八景 羽咋郡志賀郷内の八勝を數へたもので、城山秋月・伊呂波橋夕照・松巖堂夜雨・福野瀉落雁・神代宮暮雪・常住院晚鐘・三味島歸帆・長手島晴嵐である。

シカヤクロウ 詩家藥籠 ↓ネンサイイツ シヨウ 燃犀一照。

シカリバル 柴刈壘 白山尾添口の登路に、大小の二壘があつて、その中に小木を叢生せ